

第3節 病 棟

1 第1病棟

<病棟機能>

- 精神科急性期治療病棟入院料1算定可能な急性期病棟である。
- 主に急性期の集中的な治療を要する精神疾患患者を対象に、修正型電気けいれん療法を目的とした患者等を受け入れている。
- 感染症（結核・新型コロナウイルス感染症等）を合併した患者を治療する専用病室を備えている。

<病床数>

保護室	6床
個室	12床
2床室	4床
4床室	8床
計	30床

<スタッフ>

医師	6人（兼務2人）
看護師	22人
精神保健福祉士	2人（兼務1人）
公認心理師	1人（兼務1人）
作業療法士	1人（兼務1人）

<活動報告>

プログラム	内容	開催	回数	患者数	スタッフ
患者ミーティング （ふれあいの会）	入院集団精神療法 他者（他患者・病院スタッフ）との交流を通し、対人関係を学ぶことを目的としている。	月2回	22	137	82
レクリエーション	精神科作業療法 変化の少ない入院生活において、季節の行事や調理OT等を行い入院生活の楽しみ、気分転換の機会にもなっている。	月2回	24	138	92

<まとめ>

- 1 病床利用率は78.2%で、目標値80.7%には届かなかったが、昨年度実績の76.2%より上昇した。また、修正型電気けいれん療法は57件施行し、昨年度の137件より半減した。これは、県内で治療可能な施設が増えたこと、クロザピン治療患者の増加の影響が考えられた。
- 2 当病棟は救急病棟の後方支援としての役割を担っている。今年度は第6病棟はじめ、他病棟から計48名の患者を受け入れた。また、新規入院患者割合40%以上が遵守できるよう、医事担当と連携しデータ推移を確認しながらベッドコントロールした。後方支援病棟としての役割を果たしつつ、診療報酬施設基準を遵守することが継続課題である。
- 3 行動制限最小化の推進に向け、令和5年度より病棟内での携帯電話等の使用を認めている。携帯電話等の使用が

可能であることから入院を決めるケースが増えており、任意入院患者割合（転出入を含めた延入院患者数での割合）は 33.6%と前年度と同様、3 割以上を維持することができた。また、懸念されていた携帯電話等の使用に伴う、個人情報流失等の重大なアクシデントの発生はなかった。

- 4 令和 7 年度は、結核や新型コロナウイルス感染症等を合併した患者の入院はなかった。

2 第2病棟

<病棟機能>

- アルコール依存症・薬物依存症・ギャンブル依存症等の治療を行う専門病棟である。
- 依存症治療の動機づけや断酒・断薬を継続するための集団プログラムの実施、自助グループやリハビリテーション施設のプログラムの活用により、回復のための援助を行う。

<病床数>

保護室	4 床
個 室	4 床
2 床室	12 床
4 床室	20 床
計	40 床

<スタッフ>

医 師	3 人 （兼務1人）
看護師	19 人
精神保健福祉士	2 人
公認心理師	2 人
作業療法士	1 人

<活動報告>

プログラム	回数(回)	参加人数(人)			
		患者	医師	看護師	療養援助
レクリエーション	57	700	0	104	4
スマイルイベント	12	178	3	17	28
RD メッセージ	3	34	0	3	0
埼玉ダルクメッセージ	10	96	0	11	0
フリッカメッセージ	3	15	0	2	0
マックメッセージ	24	263	1	26	0
作業療法	32	432	0	32	33
ウォーキング	7	47	1	12	2
ヨガ・瞑想	25	224	0	27	28
SGM	32	460	29	61	29
CST（再発予防プログラム）	48	649	50	91	51
勉強会	50	765	46	51	49
AA 紹介	3	37	0	3	0
断酒会紹介	2	24	0	2	0
断酒会メッセージ	14	168	2	14	0
AA メッセージ	59	569	0	54	0
NA メッセージ	5	60	1	5	1
残棟プログラム	11	157	0	11	0
集団栄養指導	6	82	0	6	0
酒歴・薬歴発表	9	149	8	11	7
DVD 鑑賞	24	188	0	24	0
テキストミーティング	28	386	0	29	19

プログラム	回数(回)	参加人数(人)			
		患者	医師	看護師	療養援助
スタッフ合同ミーティング	26	402	5	29	30
年末・ニューイヤーミーティング	3	48	0	3	0

<まとめ>

1 病床利用状況

病床利用率は 68.8%という結果となり、目標値 73.5%を達成することはできなかった。毎月、入院患者の受け入を行っていたが、10 月以降より入院を継続する患者が少なくなったことで、病床利用率が大きく低下したことが要因として挙げられる。入退院支援センター経由による身体科からの紹介患者や、他病棟から依存症以外の患者を受け入れるなど、積極的なベッドコントロールを実施することで、病床利用率向上を図る。

2 実践力の強化

入院患者へのサービス向上の一環として、令和 6 年度より、病棟内での携帯電話使用を開始している。それに伴い、スマートウォッチや個人 Wi-Fi の使用など、新たなルール作りが必要となっている。今後も病棟内における通信環境に関して、社会状況を考慮しながら患者サービスの向上を図っていく。また、入院される患者さんに向けた情報の充実のため、ホームページの改定を図っており、令和 8 年度にサービス開始を予定している。

3 プログラムの実施

令和 7 年 12 月に病棟内において、新型コロナウイルスのクラスターが発生した。その際、一部プログラムの制限、代替プログラムの実施などの対応を行ったものの、感染収束以降は年間計画に則ったプログラム運営が実施できている。

3 第5病棟

<病棟機能>

- 児童・思春期の精神疾患患者の治療を行う専門病棟である。
- 埼玉県立けやき特別支援学校伊奈分校を併設している。
- 医療・教育・保健・福祉などの各機関と連携し、治療の継続を図っている。

<病床数>

保護室	3 床
個 室	27 床
2 床室	-
4 床室	-
計	30 床

<スタッフ>

医 師	5 人
看護師	21 人
精神保健福祉士	1 人
公認心理師	3 人
作業療法士	2 人

<活動報告>

(1) 病棟ミーティング

週1回水曜日に、病棟に関わる全ての人達の間で双方向性のコミュニケーションを促進すること、病棟の子どもたちに起きている関係性や力動を理解し受け入れることを目的に実施している。コンダクターは医師、コ・コンダクターは看護師または療養援助部職員が行っている。

(2) レクリエーション

週1回木曜日、患者が興味・関心をもって参加でき、季節を感じられるようなレクリエーションを OT・看護師が中心となって企画・運営している。レクリエーション活動を通じて、集団行動を体験することや、仲間作りを目的としている。

(3) グループ活動

対人関係のスキル・自主性の向上を目的とし、男女に分かれてグループ活動を実施している。

活動には医師・看護師・コメディカルが付き添い、週1回1時間の定例会で患児が企画した内容を実施している。社会性を育みルールを学ぶことを目的に、集団で公共施設を利用するなど病院外活動も取り入れている。

(4) 家族教室

発達障害を持つ患者の家族を対象に、発達障害について知識を深めること、家族交流の場を提供する家族支援を目的としている。近年、参加人数が減少していることから、今年度は家族教室について見直し改定した。今年度より前期・中期・後期の3クールに変更した。また1クール5回から4回に変更した。「疾患についての医学的知識」「子どもへの対応法」「教育現場における資源について」「ゲーム依存について」の講義45分、家族交流の場であるグループワークを45分実施した。参加家族からの反響は大きく、次年度も引き続き家族教室を企画し開催する。

(5) ペアレントトレーニング

小学校低学年の ADHD の子どもを持つ家族を対象に、環境調整や子どもへの肯定的な働きかけを学ぶとともに、保護者や養育者の関わり方や心理的ストレスの改善、子どもの適切な行動の促進と不適切な行動の改善を目的に開催している。全 11 回を 1 クールとして具体的場面を設定したロールプレイを行うことで、子どもとの適切なやりとりを身につける機会としている。

(人)

プログラム	開催日	回数	患者・患者家族	医師	看護師	療養援助他
病棟ミーティング	毎週水曜日	44	609	53	54	52
レクリエーション	毎週木曜日	36	579	47	69	56
男子グループ活動	毎週月曜日	39	285	57	41	39
女子グループ活動	毎週月曜日	39	391	37	46	70
家族教室	不定期金曜日	12	100	3	26	24
ペアレントトレーニング	不定期金曜日	11	43	22	22	22

<まとめ>

- 1 病床利用は 94.1%であり、昨年度より 1.3 ポイント増加した。今年度は、11 月～1 月病床利用率が 99～100%と満床状態が続き、他病棟での入院受け入れを依頼した。病棟運営会議にて毎週入退院状況を確認し、ベッド調整を行うと共に、他病棟に入院された入院患者を早期に受け入れられるよう連携を図り、転棟調整を行った。
- 2 「令和 7 年度における第 5 病棟の 1 日毎の男女別入院患者数の合計」は、男子入院患者数 3,638 名、女子入院患者数 6,800 名であり、女子の入院患者数が増加した。そのため、男子病室列と女子病室列にパーティションを設置する等、ベッド配置を工夫し入院環境を整備した。
- 3 新興感染症による病棟内クラスターは 0 件であった。季節ごとの流行感染症に対し、感染発症時は外泊で自宅療養する等、感染症の拡大防止に努めた。
- 4 埼玉県立けやき特別支援学校伊奈分校との情報交換会を毎月 1 回開催し、学校との情報共有を図った。また、毎月の学校病棟連絡会では、学校と病棟との連携を図った。
- 5 令和 6 年 7 月から 9 月にかけてクラウドファンディングを実施し、8,815,000 円もの寄付金を頂いた。令和 7 年 3 月 18 日、改装した農園と ICT ルームのオープニングセレモニーを開催した。農園では、毎週火曜日に集団プログラムとして農作業を実施した。夏には子どもたちが育てた夏野菜を、当センター納涼会で地元関係者の方々に振る舞うことができた。ICT ルームでは、毎週火曜・金曜日にルームを開放し、ICT 講義を受講し確認テストに合格した子どもたちが、学習での調べものや関心のある動画を視聴するなど、有意義な学習環境として活用している。

4 第6病棟

<病棟機能>

- 精神科救急急性期医療入院料算定の認可を受け、夜間・休日の緊急入院を中心に埼玉県精神科救急医療体制整備事業を補完する病棟である。
- 医療観察法の鑑定入院・特例1・特例2を受け入れている。
- 早期退院に向けてチーム医療を行い、地域への医療の継続性を図る。

<病床数>

保護室	20 床
個室	30 床
2 床室	-
4 床室	-
計	50 床

<スタッフ>

医師	8 人
看護師	34 人
精神保健福祉士	3 人
公認心理師	1 人
作業療法士	1 人

<活動報告>

(1) 服薬SST

病気と薬の作用についての情報を提供し、入院前の精神状態を現状と比べながら振り返ることで、アドヒアランスの向上を目指す。

(2) 病棟懇談会

集団内の対人関係の相互作用を用いて、対人場面での不安や葛藤の除去、患者自身の精神症状・問題行動に関する自己洞察の深化、対人関係技術の習得をもたらして症状の改善を図る。

(3) レクリエーション

レクリエーション活動を行い、他患者・スタッフとの交流を通して対人関係を学ぶ。

プログラム	開催日	回数	患者	医師	看護師	療養援助	参加合計
服薬SST	毎週火曜日	16	15	0	32	0	47
病棟懇談会	第1・3木曜日	31	148	34	34	61	277
レクリエーション	第2・4木曜日	11	88	7	14	17	126

<まとめ>

- 1 病床利用率は昨年度より 3.1 ポイント増加し 84.8%だった。安定した病床利用率を確保できるよう、他病棟と連携し入院を受け入れる。
- 2 緊急入院を常時受け入れる体制の維持に関しては、毎朝のベッドコントロール会議や病棟運営会議にて 6 病棟の病床利用状況を共有し、他病棟への転棟の検討を行った。主に 1 病棟との連携を継続し、6 病棟の保護室利用状況によってタイムリーな転出入を調整した。

3 看護師のモジュールチームによる退院支援計画の共有やケアプランに関するディスカッションの定例化を図り、計画的な退院支援につながるよう活動した。入院がすでに長期化している患者や長期化が予測される患者の退院支援に関して、入退院支援センターなどの他部門やあらゆる多職種との連携を強化し、推進することが課題である。

5 第7病棟

<病棟機能>

- 医療観察法の対象者に入院医療を行う専門病棟である。

<病床数>

保護室	2 床
個 室	31 床
2 床室	-
4 床室	-
計	33 床

<スタッフ>

医 師	6 人 (兼務 3 人)
看護師	43 人
精神保健福祉士	3 人
公認心理師	2 人
作業療法士	2 人

<活動報告>

プログラム	内容	回数 (回)	参加人数(人)			
			対象者	医師	看護師	療養援助
全体ミーティング	集団の場に慣れると共に、対象者全員とスタッフによる話し合いを行う。	18	418	12	166	75
朝の会	生活リズムを整え、自分自身の病状、体調、気分、意欲を確認するため、各ユニットで毎朝各自の報告が行われる。	265	5,666	16	1,925	1,004
ユニットミーティング	対象者同士の信頼関係づくりやコミュニケーション能力等の向上のため、ユニット内で生活上の問題やルールを話し合う。	38	801	4	274	193
ケヤキ	疾病理解を促し、服薬に対するアドヒアランスを向上させ、集団での協調性を養う。	16	42	8	30	12
やわらか頭	自身の認知機能の傾向を知る機会とする。	5	20	0	5	8
SST	日常生活技能獲得・対人交流技術向上を目的に対人関係場面の練習等を行う。	14	34	0	31	14
IH の会	対象者が主体となって自分自身について知る。	4	11	0	0	7
シラコバト	再発を予防し、生活能力を再獲得することを目的に行われる。	13	21	1	22	11
シラコバトアドバンス	自己肯定感を高め、「自分自身をいたわるために行う小さなこと」を見つける。	3	13	0	7	0
emo 活	日常生活の中で生じる自身の感情と行動・態度が繋がっていることに気づく目的で行われる。	16	73	1	19	24
内省	対象行為に対する内省深化と再発予防を目的に行われる。	12	71	1	24	21
放火防止	放火という手段に注目し、その特性を自身の振り返りにつなげる。	6	12	0	16	10
物質使用障害	他害行為や病状の悪化に関連していることを自覚し、予防方法を獲得することを目的とする。	10	51	1	26	3
就労準備	自分にあったライフスタイルを考え、仕事をする上で必要なことを知る	18	32	0	26	32
社会復帰講座	退院支援や社会復帰の仕組み等知識を深め、社会復帰の意欲向上を促す。	13	25	0	10	28

プログラム	内容	回数 (回)	参加人数(人)			
			対象者	医師	看護師	療養援助
外泊報告会	うまくいったことや課題について他者と共有し、互いの学びとなることを目指す。	3	23	0	2	8
マナー講座	社会で生活する上でのマナーやエチケットを学ぶ。	2	8	0	0	4
家族ゼミナール	家族が身体的、心理的、社会的な回復を目指すことを目的に行われる。	3	0	1	6	11
クラフト	小集団で作品作りを通した達成感を獲得し、自分に合ったストレス発散方法を見つける。	11	73	7	14	21
グッジョブスポーツ	運動を通した体力向上と対象者同士の連帯感を強め、治療につなげる。	24	172	0	24	51
ヘルスケア	健康増進の情報発信、栄養士や歯科衛生士による講義を開催し、健康意識の向上を目的とする。	2	32	0	8	6
レクリエーション	6月：縁日・カラオケ大会 9月：運動会 12月：クリスマス会 3月：映画鑑賞・カラオケ大会	4	82	1	17	15
看護面接	治療関係の構築、評価のための情報収集、治療の般化を促す。また内省深化を図る等の目的で行う。	172	245	2	270	24

<まとめ>

- 1 病床利用率は 92.3%であり、年間目標の 97.6%を下回ることとなった。7月まで病床利用率は減少したが、8月以降は 90%以上に回復した。下半期は鑑定入院数 0 が続き、転院依頼もほとんどなかった。今後は、回復期対象者の早期ステージアップや、入院が長期化している対象者への退院支援強化に取り組む必要がある。
- 2 対象者の特性に合わせ、「シラコバトアドバンス」「放火防止」「物質使用障害」「ヘルスケア」の 4 つのプログラムを新たに導入した。ヘルスケアプログラムでは、生活習慣病予防のための健康増進を目的とし、個々の健康意識の向上を図ることができた。また、令和 7 年度から社会復帰期を対象とした携帯電話自己管理を始めており、今後も円滑な社会適応を支援する取り組みを充実させる必要がある。
- 3 感染症対策を徹底し、流行時期であっても感染症発生による外出・外泊の中止、治療プログラムの中止等の治療停滞を防ぐことができた。今後も、対象者にとって必要な治療が安全に継続できるよう、多職種で適切に検討していく必要がある。